

[芸術教育記録]

2014年度パフォーミング・アーツ学科1年生宿泊研修報告

2014 Report on the Performing Arts Field Trip Seminar for the First-Year Students

小佐野 圭

Kei Osano

1. はじめに

パフォーミング・アーツ学科では、昨年に引き続き、今年も9月に1年生宿泊研修を行った。「狂言」の観劇と演奏会を研修の柱として実施した。上演芸術を体験あるいは体感して今後の学生たちの研究活動に活かそうとするものである。学生たちは舞台（ステージ）と再現者（パフォーマー）のライヴの関わりの中で、創造性や感性を体験し、その成果発表をレポートで文章化した。研修によって感じたことや理解したことを文章にすることで、今後の学生たちの研究課題に繋げることが出来る。

1日目には演劇分野から「狂言」の観劇と「ソプラノ独唱とテノール独唱の演奏会」の鑑賞を行った。また2日目には、「キャリア」についての講義を実施した。前日の観劇・鑑賞を踏まえて二つの公演を聴いた感想を書き、研修のまとめとした。

2. 研修概要

到達目標

芸術への意識と価値観を高め、今後、自らの学習へ意欲を示すことが出来る。また、他者に自分の考えを伝えることが出来る。

目的

日本古典芸能の知識を得ると同時に、横浜能楽堂の舞台に立つという体験を通して、芸術空間を体感すること。また、演奏会を通して、声楽独唱を鑑賞し、作曲家・作品の本質に触れること。この二つの公演を通して、「パフォーミング・アーツとは何か」について考えること。

実施概要

日 時：平成26年9月16日（火）～17日（水）

場 所：観劇：横浜能楽堂 鑑賞：ローズホテル横浜（2階ザ・グランドローズボールルーム）

宿 泊：ローズホテル横浜

参加者：平成26年度 パフォーミング・アーツ学科 1年生

参加教員および職員

太宰 久夫

担任：小佐野 圭、松川 儒、馬場 眞二、平高 典子/助手：都甲 英里、畦地 香苗

キャリアセンター 島 健太郎

実施内容

一日目は人間国宝 茂山 千之丞氏の長男である狂言師 茂山 あきら氏（ほか4名）を招聘し、横浜能楽堂にて「蝸牛」「濯ぎ川」を演じる。また、バックステージ体験を通して、舞台に乗り、身体を通して現場を学ぶ。また、芸術系の現場で活躍しているパフォーミング・アーツ学科の卒業生である歌手田中 眞氏と小松原 明紀氏・ピアニスト江幡 俊史氏を招聘し、演奏会を行う。演奏曲目はモーツァルト、ビゼー、ドニゼッティ等の作品である。二日目は「キャリアについて」というテーマで講義を行いその内容をレポートに要約する。また2つの公演を鑑賞した感想をレポートにまとめる。

1 狂言

日時：平成26年9月16日（火）開演13時半 場所：横浜能楽堂

出演：「濯ぎ川」夫：茂山 童司 女房：増田 浩紀 姑：丸山 やすし 後見 茂山 あきら

「蝸牛」山伏：茂山 宗彦 主人：茂山 童司 太郎冠者：茂山 あきら 後見 増田 浩紀

1 はじめに（太宰 久夫）

2 解説（茂山 あきら氏）

3 「濯ぎ川」

休憩（10分）

1 「蝸牛」

2 バックステージツアー

2 サロンコンサート ～音楽の贈り物～

日時：2014年9月16日（火）開演20：00

場所：ローズホテル横浜2階 ザ・グランドローズボールルーム

出演：ソプラノ：小松原 明紀 バリトン：田中 眞 ピアノ：江幡 俊史

1. 二重唱

歌劇「ドン・ジョヴァンニ」より“手を取り合って”/W. A. モーツァルト

「Don Giovanni」“Là ci darem la mano”/W. A. Mozart

2. バリトン独唱

陽は既にガンジス川から/A. スカルラッティ

“Gia il sole dal Gange”/A. Scarlatti

3. バリトン独唱
歌劇「カルメン」より“闘牛士の歌”/G. ビゼー
「Carmen」 “Votre toast, je peux vous le rendre”/G. Bizet
4. ソプラノ独唱
くちづけ/L. アルディーティ
“Il bacio”/L. Arditi
5. ソプラノ独唱
歌劇「ランメルモールのルチア」より“あたりは沈黙に閉ざされ”/G. ドニゼッティ
「Lucia di Lammermoor」 “Regnava nel silenzio”/G. Donizetti
6. 二重唱
歌劇「魔笛」より“パパパの二重唱”/W. A. モーツァルト
「Die Zauberflöte」 “Pa-Pa-Pa”/W. A. Mozart

3. スケジュール

日付	時間	場所	内容
9月16日（火）	12:30	横浜能楽堂	横浜能楽堂集合
	13:30		〈研修Ⅰ〉 「狂言観劇」
	17:00		終了後、各自ホテルへ移動
	18:30	ローズホテル	夕食
	20:00		〈研修Ⅱ〉 「サロンコンサート鑑賞」司会：松川 儒
			〈研修Ⅲ〉 質疑応答タイム：学生&出演者&教職員（馬場 眞二）
	22:00		就寝
9月17日（水）	7:30	ローズホテル	〈研修Ⅳ〉 講義「キャリアについて」 グループワーク「パフォーミング・アーツとは何か」 担当：島 健太郎 司会：平高 典子 グループディスカッション レポート：「今回の研修を受けて考察すること」 統括：太宰 久夫 質疑応答タイム：学生&教職員
	9:30		
	11:30		解散

4. 学生からのレポート（抜粋、原文のまま）

1. キャリアについて

◇就職内容は1次が書類、2次が筆記、3次が面接であり、筆記では今までの知識が求められるので、少しずつ早めに勉強しておくべきである。面接は自分のことを自分の言葉で表すことが求められ、今までの面接とは違う。そこで相手に伝わりやすい言葉の量は1分間に300～400字なのでそれぐらい

で話せるといい。一般企業でも芸術学部で学んだ日々の努力、計画力、目標を決めて行動してコツコツとやる力、トーク力などは活かせる、またこれらは求められている人材、自分で行動できる人材である。プロを目指すなら、「13才のハローワーク」などで調べるのも良い。巡ってきたチャンスは逃さず、チャンスは自分で作り、覚悟と努力が必要である。また、やりたいことだけじゃなれないし、好きなことだけでも出来ないのだから、目標のためにすべきことを考え、大学の勉強をしっかりとやる。今から出来ることは時間を守る、あいさつをする、「ギリギリセーフはアウト！」早めの行動を心がけ、自らあいさつをすることを心がけること。また、好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、冒険心を持って、人生の質を深めていく。

◇大学に入学してから進路について考える場面がたくさんあり、不安を感じる部分がありました。しかし島さんのお話を聞いて、とても前向きに考えることができ、広い視野で学んでいいんだ！という気持ちになりました。人生の質が深まる「好奇心」「柔軟性」「楽観性」「冒険心」は、今の私には足りないものだと思います。特に「楽観性」がなく、すごくネガティブな思考になることが多いので、後ろは見ず、今の自分に自信を持ち前向きに頑張ることを努力しようと思います。好きだから絶対にやりたい職に就けるということではないので、しっかりとこれからのスケジュールをたて、意識をして行動したいと思いました。生きていく上で、基本中の基本である、「時間（約束）を守る」と「挨拶をする」はこれから今まで以上に意識していきたいと思っています。

◇島さんのお話を聞いて、私も大学でやっていることと将来やりたいことがあまり結びついていませんでしたが、芸術学部で身につく自ら考え動く行動力や緻密な計算をする力をしっかり自分の物にして、就職に役立てたいです。バブル時代と比べてはるかに低っている求人率で就職率も内定率の約半分ということで、私もやりたい事ができなくならないよう目標達成のため、計画を立てひとつひとつクリアしていこうと思いました。プロの道へいくのはとても大変なことだと思いますが、いろいろな壁を越え、障害を越えてゴールする面では就職も今の時代大変なのだと学びました。そして就職するにあたり面接試験がありますが、どんな質問にもすばやく答え、簡潔に分かりやすくまとめられる力をこれから身につけていきたいです。

◇始めに就職について、詳しくお話を聞きました。芸術学部の就職率は56.7%、内定率が96.2%と就職する職種は専門職が多く、また芸術学部は就職を行にくい学部と思われがちだが、日々の努力、緻密な計算などが芸術学部でやしなわれ、社会の求めている人材である事分かりました。そして芸術学部からプロになる方も多く。プロになるためには、現在からスケジュールを立てて、ひとつひとつクリアしていく事が必要クリアしていく事が目標に結びつき、プロへと近づいていく事もできます。就職するためには、書類選考→筆記試験→面接試験と順にクリアしていく必要があります。最後の面接では自分の事を相手にきちんと伝える必要があり、だいたい1分間話するのに相手にきちんと伝わる時間は300文字~400文字です。今から自分の事を相手にきちんと伝えていけるようにしていきたいです。

2. 「狂言」「ミニコンサート」2つの公演についての感想

◇狂言は私の中ではもっと硬苦しいものだと思っていたけど、セリフが私たちの話している感じと似たところがあって聞きやすく、ユーモアがあって面白かったです。橋がかりと舞台上でセリフを同時に言って被って聞こえなかったりしたところが少し残念な気もしましたが、次、場面上に表れる人物の行動が見えていて、そこでもしっかりと状況を説明する形式はとても新鮮でした。効果音を声でやったり、動きが大きいところが、個人的に面白かったポイントでした。演劇のように大道具があるわけではないけど、身につけている小物や身ぶり、声で表現する狂言はとても面白く、見ている人の想像

が加わることによって劇が完成する感じがすごく好きでした。狂言は今まで観たことがなく、むしろあまり好きではないと思っていた感覚が一気に変わりました。これからも観れる機会があれば観に行きたいです。音楽はもともと歌が上手くなかった人があそこまですてきな歌を歌えるようになるなんてびっくりしました。やりたい事を見つけてそれに向かって努力したらできないことはないんじゃないかなと思えました。

◇狂言について 春セメでPA概論をとっていましたが、病欠で茂山あきら先生の講義を受けられなかったので、今回が初めての狂言でした。私が持っていたイメージは、もっと古典的で、見てもあまり分からないものだと思っていましたが、今回の公演を見て、そのイメージがくつがえされました。新作である「濯ぎ川」は言葉も分かりやすく、動きも面白く楽しく見る事が出来ました。「蝸牛」は山伏の表情や動きが面白く、また太郎冠者が勘違いする場面が滑けいでたくさん笑いました。他の演目も見に行きたいと思いました。

ミニコンサートについて あんなに近くで声楽を見たのは初めてだったので、とても迫力がありました。小松原さんの高音がとても心地よく、鳥肌がたちました。田中さんは話している声と歌っているときのギャップに驚きました。江幡さんのピアノは、どんな曲調でも綺麗でした。特に「パパパの二重唱」が聴いていて楽しく、動きもコミカルで好きな曲でした。アンコールで歌った「美女と野獣」は好きな曲だったので聴けて良かったです。

◇狂言 初めて、本当に公演されている狂言というものを観ました。狂言は昔からありとても奥が深いものである事を知りました。今回観た、濯ぎ川は50年～60年前に出来た作品であり、狂言の中でも新しいと言われる作品で、とても私にはわかりやすく、言葉もジェスチャーも本当に道具がなくても、すべての内容をつかめる事も出来ました。また女性役も男性が行われており、女性より女性らしさなども出ていて感じました。初め、狂言は笑って観るぐらい面白いものだと思っていませんでしたが、声もとても芯が深く、とても楽しかったです。

ミニコンサート 玉川大学の先輩である方のミニコンサートで、私は始めてオペラを生で聞きました。声の大きさなど発声の凄さに驚きました。そして歌なのに演技を加えるなど、本当に30分が短く感じました。歌の内容がわからなくても本当に感動しました。男性の声も女性の声も2つがきれいでピアノともハモっていて、本当に感動しました。音楽もこれからたくさん聴いていきたいと思いました。

5. まとめ

長い夏休みが終わり、秋学期開始直前のこの時期における研修は学生たちが新たな心で「上演芸術」を見直し、自らの方向性を冷静に構築する時間となったようだ。レポートを分析してみると、2日目のキャリアセンター島氏の講演では、どのような人材を社会が求めているかを認識し、今現在、自分がどのような意識で日々取り組まなければならないのかということであらためて確認できたようである。今後、上演芸術の研究実績を作ることが、自分の可能性を広げることも認識でき、一層、前向きな心が芽生えたのではないだろうか。

2つの公演（狂言とコンサート）における感想レポート作成は、彼らが芸術を文章によって理論的に構築するという重要な学修の力になる。文章を書くためにも、芸術作品における「観る力」「聴く力」を養っていくことは必要不可欠だし、それらの「力」は、まさに人を観る力や人の話を聴く力にも繋がっていくであろう。

最後に、彼らが、この研修で感得した美的体験と同じように、大学の学生生活の中でも、「心」を

動かし、喜びを持って「知識」を養っていただきたい。そしてその知識を自らの芸術活動に活かし社会貢献に繋げていただきたい。



〈研修写真01〉
「太宰久夫先生が茂山あきら氏を紹介」



〈研修写真02〉
「狂言：濯ぎ川を上演」



〈研修写真03〉
「横浜能楽堂におけるバックステージ体験」



〈研修写真04〉
「キャリアセンター：島 健太郎氏の講演」



〈研修写真05〉



〈研修写真06〉
「サロンコンサートの様子」